

# 開かれる「日本事情」

橋本敬司

## 1 創造へと開かれた場

学習者である留学生と教師それぞれが、自らの日本事情を創造しなければならないということについては、既に論じた。<sup>(1)</sup>それは、日本事情が単なる情報や知識を増やすための科目ではなく、臨床の知とも言うべき知、生きられる知が求められ実感できる生きられる場でなければならないと考えたからである。そして、次に考えなければならないことは、この知が実感でき獲得できる方法についてである。

人間存在は、身体と言語を媒介として世界を構築している。つまり、身体と言語に基づいて自らの世界を生きているのである。従って、生きられる場である日本事情もまた、この身体と言語によって創造し構築されなければならない。そのためには、自己の身体と言語がモノローグという自己閉塞に陥らないように、他者へと開かれていなければならない。自己の言語と身体は、ダイアログによる他者とのコミュニケーションによって常に更新されなければならないのである。それぞれが自らの日本事情を創造するには、このような他者に対して開かれたコミュニケーションの場が不可欠である。日本事情が、異文化間コミュニケーション、多文化間コミュニケーションの場として捉えられるのは、この意味においてでなければならない。従って日本事情のクラスは、文化背景を異にする学習者のディスカッションの場であるとともに、同じ時間と空間を共有して共に生きられる場でなければならない。

このような日本事情は、言うまでもなく、留学生だけではなく日本人学生にもその場が共有できるよう開かれていなければならない。つまり留学生、日本人学生が共に履修できる科目としてまず制度的に開かれなければならない。また、知的側面から言えば、全ての学習者が、既に獲得している日本・日本人に対する考えを解体し、新たに日本と日本人という共同幻想、共同主観を実感し理解することを通して自らの日本事情が創造できるよう開かれていなければならないのである。

本稿は、著者が広島大学総合科学部において教養的教育として学部生のために新たに開設された日本事情概論において試みた授業を批判的に反省し、今後日本事情がどのようにあるべきか考察するものである。

## 2 日本事情概論の授業について

### 2-1 授業の設置

広島大学においては、留学生センターが留学生を対象として行っている日本語・日本事情の授業は、単位認定の関係で教育学部の開設科目となっている。この日本事情のクラスには、卒業に必要な外国語の単位として履修する学部留学生と、その他の大学院留学生、研究留学生などが混在しているが、ここに日本人学生が参加することは一切ない。日本語教育が日本人学生に開かれていないことをも考えた場合、この状況は、一種の留学生の囲い込み現象だと言えないだろうか。これは、日本事情が日本で生活する留学生にだけ必要な情報、知識、常識を教え学ぶ科目という既成の考え方に囚われ、それを脱し得ていないことを意味している。

このような状況下では、たとえ興味があったとしても、留学生のためにだけ開設され、履修することも単位も認められていない日本事情のクラスに日本人学生を参加させることは、実現には非常に困難である。従って、制度として、日本人学生にとっては教養の単位として認定され、学部留学生にとっても教養あるいは外国語の単位として認定される環境を実現しなければ、留学生と日本人学生が共に学ぶことは難しい。

広島大学においては、総合科学部を中心とした教養的教育の充実が図られるなかで、留学生センターもそれを支援するために、1998年度前期より教養に相応しい授業を提供し、それを日本事情概論として総合科学部開設の授業科目とした。

従来の日本事情が、教育学部開設の授業であって、留学生だけを対象にしていたのと異なり、日本事情概論は、日本人学生、学部留学生共に教養の単位として認められる科目として双方に対して開かれたのである。このように日本人学生、学部留学生共に単位として認められる日本事情の授業が開設されたことを契機に、日本事情概論の授業が日本人学生と外国人留学生のコミュニケーションの場として、またそれぞれの日本事情を創造する場として開かれるよう試みた。以下その授業に関して報告し、併せて今後の可能性を探ってみる。

### 2-2 1998年度前期の授業

1998年度前期の正式受講者は、日本人学生10名のみであった。残念ながら、期待していた学部留学生の受講者は0名であった。その理由として考えられることは、従来の教育学部開設の日本事情が外国語の単位として必須科目であるのに対して、日本事情概論は教養の選択科目の一つである、ということである。そこで、善後策として、毎日の学習に比較

的ゆとりがあり日本語能力が上級レベルの日本語・日本文化研修留学生達に、このクラスに参加するよう勧め8名の参加者を得た。(アメリカ合衆国2名、タイ2名、ポーランド2名、チェコ1名、中国1名) 授業の形態は、半期15コマのうち前半を講義とそれを基にしたディスカッション、後半は留学生と日本人学生のペアまたはグループを作り、それぞれが日本と自国を比較することを前提としたテーマに基づいた発表と、それを巡ってのディスカッションを行った。

#### a 講義

講義のテーマは1身体論、2生と死と自殺、3アイデンティティについて、4日本語のオノマトペについて、であった。

現代日本の社会と文化を考えるためには、歴史的即ち通時的側面と地理的即ち共時的側面とから捉えなければならぬと考え、各テーマごとにレジュメあるいは資料を用意し、考察の手がかりとし、また後半の発表に向けての指針となるよう図った。

- 1、身体論に関しては、『古事記』では身体的に天地が創造され、『聖書』では言葉によって天地が創造されること、西行の歌にはしばしば心と身が歌われていること、『方丈記』、『正法眼蔵随聞記』を基に日本では心身合一がしばしば説かれてきたことを明らかにした。更に、中原中世の詩にも身体に対する意識が明確に現れていることを提示した。
- 2、生と死と自殺では、歴史的に日本人が死を特に自殺をどう捉えてきたかを理解し、日本人はよく自殺するという一種の先入観を解体することを目的とした。モーリス・パンゲの『自死の日本史』(筑摩書房)を基にレジュメを作成し、日本において自殺が救いであったり、美であり、生きることそのものであったことを明らかにした。そして、現代における日本人の自殺が一体どのような状況にあるのかを、「自殺死亡統計：人口動態統計特殊報告」(厚生省大臣官房統計情報部1972年)によって明らかにし、日本が決して自殺大国でもないことを明らかにした。
- 3、アイデンティティに関しては、結局自己のアイデンティティを支える具体的事項だと考えられていることが全て恣意的で文化的に意味化された事柄であり、それは文化内での共同幻想に他ならないことを明らかにした。そして、重要なことは、一切の根拠をゼロにした後に、新たな他者とのコミュニケーションの中で、如何なる自己を形成していくかが大切であることを考察した。
- 4、オノマトペについては、日本語が如何にオノマトペの豊富な言語であるかを、各留学生の母語と比較しながら、日本人の身体性とも関連させて考察した。

## b 共同発表

後半の学生たちによる発表のテーマは以下の通りである。

1 日本人と外国人の宗教観、2 コミュニケーションについて、3 反核について、4 結納について、5 結婚について、6 離婚について、7 襖ぎについて、8 お茶について  
各発表45分を与え、その半分を発表半分を討論に当てた。

1の発表は、日本人学生と留学生にアンケートを行い、神の存在を信じるのかどうか、また宗教の必要性について考察するものであった。2もアンケートをとり、日本人と外国人のコミュニケーションの在り方の違いについて考察した。3から7は、それぞれが、テーマに関する資料を読んで調べたこと、あるいはインターネットで調べたことをもとに、日本と外国の社会状況、文化習慣の違いについて発表した。発表内容の善し悪しはあったが、比較文化的視点に立つ考察ができた。

## c 問題点

講義に関していえば、身体論、生と死と自殺、に関しては、内容が難しかったこともあって、学生に十分な理解が得られなかった。教師の興味と判断だけでこのような授業を行うことの困難さを実感した。学生の興味を取り入れた内容を講義できる柔軟性と多様性が教師に強く求められることを痛感した。また、学生の理解の助けとなる資料をできるだけ事前に配布しておく必要がある。

学生たちの発表に関しては、日本人学生の履修者の殆どが一年生で、他の授業との兼ね合い、発表が試験期間中であったことなどから、発表の資料集めの時間などが不十分であった。また、レジュメの作り方の指導も一切せず、学生たちにまかせていたので、資料のない発表があるなど、聞いている留学生達には言葉が難しく十分理解できないこともあった。発表のテーマに関しても、一切の基準を設けず、それぞれが自由に決定したこともあって、聞く側からすれば余り興味のもてないこともあった。クラス全体でどのようなテーマが良いかを議論し、それぞれのテーマに関して分担するのが望ましいのかも知れない。

日本人学生の場合は、ディスカッションにおいては、積極的に発言する者とそうでない者とに分かれてしまった。指名してもすぐに自分の意見がまとめられなかったり、発言することに対する後込みが見られ、必ずしも活発な議論は行われなかった。学習者をコミュニケーションの場を開いて行く方策を考えなければならない。

留学生の場合は、日本語力の問題があり、聞いてすぐ理解することの困難さと自己の意見を日本語で発言することの困難さがあったようである。

コミュニケーションの在り方としては、前半の講義とディスカッションの期間は、一部

の学生以外は、留学生と日本人学生の交流が余り活発ではなかった。共同発表においても、発言する学生と発言しない学生の差が顕著であった。また、発表のペアを、共同発表させる直前に作ったことから、十分な意志疎通ができず、学生相互のコミュニケーションがあまり深まっていかなかった。早い時期からペアなりグループを作るのがよいと考えられる。

#### d まとめ

初めて試みた授業だけに、以上のような問題点や課題が山積している。しかしながら、留学生、日本人学生双方が、それぞれの興味に基づいてテーマとした文化について調査することを通して、不十分ながらも日本の文化・社会と自国の文化・社会を比較することで、その類似点・相違点を見つけることができ、また互いのコミュニケーションを少しは深めることができた。また、留学生、日本人学生それぞれの発言を通して自己を見つめる機会が得られたことは十分に意味があったと言える。

最も批判され反省しなければならない点は、教師の側の問題である。取りあげたテーマに関して、幅広い知識と深い考察がなければならず、また、学生の意見・発言に対してフレキシブルに対応できる能力が必要である。更に、ディスカッションを円滑に進め、それぞれの意見を引き出すために、クラス全体の雰囲気を作り上げる能力など、教室経営の総合的な能力がなければ十分な成果は得られない。日本事情が決して知識の切り売りではないとすれば、日本事情の場を通して、学習者と共に学び、自己の日本事情を創造することができる教師を育てていく必要がある。

### 2-3 1998年度後期の授業について

正式に登録した履修者は、日本人学生23名、このうち前期にも履修していた者は1名であった。幸いなことに経済学部留学生の履修者がいたが、わずか1名であった。そこで、前期同様日本語・日本文化研修留学生など15名を参加させた。(韓国4名、中国2名、アメリカ合衆国2名、ロシア2名、ニュージーランド2名、インドネシア1名、イギリス1名、ベトナム1名)履修者が、前期の倍の人数になったため、ペアで共同学習・発表するのは不可能となった。また、前期の授業では余りコミュニケーションが活発に行われなかったことの反省から、コミュニケーションが円滑に行われるための環境づくりとして、授業の第一回目から、5、6名のグループを7つ作り、グループごとに席を決めて座らせ、質問、議題があるとそれに関してグループで話し合い、発表させるようにした。

## a 講義・発表

講義テーマは、1水のイメージと文化的意味、2家族について、3「気」について、4オノマトペについてであった。前期同様に講義とそれについての討論を行った。

講義を始めるに当たって、1では、意味の恣意性と文化の恣意性、更には各文化における意味の共通性について考えるために、水を例として挙げた。世界の各文化において、水がどのようなイメージで捉えられ意味が与えられているのかを示し、その共通性と相違性について考えた。自然存在である水がどのように文化的意味を獲得していくのかを考察することで、現在の文化の形と、自己の在り方を反省するきっかけになればとの意図があった。2の家族については、最近の日本の家族の在り方が、長い歴史の中で形成されてきたものではなく、つまり日本独特の形ではなく、明治以後の西洋文明の受容によるものであることを明らかにし、現在、国際化と解体に向かっている家族の在り方について考えた。3の「気」については、気をつく語句、慣用句を手がかりに、日本語における「気」について考えると共に、人間関係を形成する気について考察した。オノマトペは前期と同様の内容であった。

各グループの発表のテーマは、1コマーシャルについて、2あこがれの職業、3祝祭日について、4正月について、5大学生の生活について、6アルバイトについて、7大友克洋の「アキラ」について、であった。

1は、日本、韓国、中国のテレビ・コマーシャルを比較分析することでそれぞれの特徴を明かにすると共に、コマーシャルが世相を色濃く反映していることを明かにした。2は、日本と中国とイギリスの少年、大学生のあこがれの職業が何かを見ることで、その社会がどのような状況にあるのか考察した。3は、日本、韓国、アメリカ、ベトナム、インドネシアの祝祭日にどのような特色があるかを明かにし、その理由について考察した。4は、日本、ベトナムの正月について発表し、正月の文化的意味について考察した。5は、日本、韓国、ロシアの大学生の生活形態、経済状況などを、アンケートを基に比較分析しその特徴について考察した。6、日本、韓国、中国の特に大学生のアルバイトの状況について調査し、その生活形態の違いについて考察した。7は、以上の発表とは異なり、「アキラ」というアニメーションそのものの意味について、人間と自然の相克という点から宮崎駿の「もののけ姫」と比較しながら考察し、作者大友克洋のメッセージとは何かを考えるものであった。

前期同様、発表をどのような形で行うか一切指導はしなかったが、各グループそれぞれメンバー全員が調べたこと考えたことを発表し、最後に一人がまとめるというものであった。ビデオを使用した発表、コンピュータを利用した発表もあり、各グループがそれぞれに工夫を凝らした発表を行った。発表者はそれぞれ、日本人学生と留学生全員が比較文化

論的視点に立ち、日本と留学生の国との文化について学習し考察した。発表後の討論では、各自が積極的に意見を述べ、議論も活発に行われた。このクラスはまさに異文化接触の場であり、異文化間コミュニケーションの場として十分に機能していたとすることができる。

## b 授業に対する評価と問題点と考察

授業に対する評価と問題点については、講義終了に際してアンケート（付録1参照）を行った。この回答・意見を基に批判的に考察したい。

### 1 授業についての感想

- a、普段考えなかったことを考えることができた。（日本人学生）
- b、留学生の人達と直に話ができとても刺激を受けた。（日本人学生）
- c、日本人の学生と他の国の留学生たちといっしょに勉強ができて楽しかったです。（留学生）
- d、他の国のことだけでなく、日本のことも改めて考えました。（日本人学生）
- e、日本人の学生と接する機会がなかった東京の生活と比べて、日本人の学生と一緒に共同作業をしてよかった。（留学生）

以上のアンケート結果からは、授業を実施する段階で意図した目的は達成できたと考えられる。

### 2 共同発表について

共同発表に関して、一緒に準備した時間は、だいたい2～3時間であったが、あるグループの場合は、10時間を超えていた。この準備に関して、殆どの学生が負担とは感じていないが、数名の日本人学生が負担を感じていた。

- f、いい加減な日本語は使えないと思い、言葉を選んでいたから。（日本人学生）

これは、留学生との共同発表の準備の中で生まれた心理的負担であるが、言語コミュニケーションの重要性に気づいたことは貴重であり、決してマイナスとは言えない。

- g、テスト期間中で忙しかったから。（日本人学生）

学期後半に発表を行う上で、テスト期間とぶつかることを回避するのはかなり困難である。

h、設定したテーマが大きすぎた。(日本人学生)

このように負担だと感じた学生も含めて全ての学生が、共同発表については楽しかったと回答した。その理由は、次のようなものであった。

i、中国とか中国人について色々聞かれて、それについて説明している時が楽しかったです。中国をもっと知ってほしいから。(留学生)

j、いろんな国から来た人のさまざまな意見を聞くことができておもしろかったです。(日本人学生)

k、アンケートの調査のためにいろいろな人と話したから。(留学生)

l、一緒に食事をしたり、授業外で集まるのが楽しかった。(日本人学生)

共同発表の意義に関しては

m、日本人だけだと片寄った意見になってしまうが、留学生の国の文化と比較することで、日本を外から見ることができた。また、日本人同士では適当になりがちだが留学生と一緒に考えることで、日本人としてのとるべき態度などについて考えることができた。(日本人学生)

以上の回答から、留学生も日本人学生も共に、互いが深くコミュニケーションできる授業を楽しんでいると感じそれを望んでいることは明らかである。

### 3 授業を履修してよかったか

全ての学生から「はい」との回答を得た。

### 4 授業の改善すべき点

n、テーマが少し難しかったので、もう少し分かりやすいテーマの方が考えやすかったです。(日本人学生)

o、ただの講義だけではなくて、ビデオやドラマなどを通じていろいろな話題が出るんじゃないかなと思います。(留学生)

p、留学生ともしっかりとたくさん話せる機会を増やして欲しい。(日本人学生)

q、他のグループと話せる機会が欲しかった。(日本人学生)

r、「日本事情」と言えば政治、経済、社会を思い浮かべるが、実際はそうではなかった。留学生と一緒にする授業なので科目の名称を変えればどうかな、と思います。(留学生)

講義、共同発表などのテーマの設定、いろいろな媒体を用いた授業の在り方など、学生の要求は様々である。また、グループ内でのコミュニケーションを重視したことがかえってp、qのような回答となってあらわれたと考えられる。rの「日本事情」という科目の名称については、意見の通りかも知れない。この名称を大切にしなければならないのか、それともこの名称を改めることで「日本事情」が開かれていくのであろうか。日本事情をコミュニケーションの場として捉えるなら、今既に、このことに関して真剣に考えるべき時期なのかも知れない。いずれにせよ、教育の主体は学生になければならない。とすれば、「日本事情」と名づけられても名づけられなくても、学生の欲する授業ができるよう教師が努力しなければならないことは、火をみるよりも明らかである。

### 3 開かれる日本事情の可能性

外国人留学生の日本文化、社会、政治、経済等に対する理解の必要性から、文部省が日本事情という科目を設けるよう通達を出して以来、既に37年が過ぎている。その後の留学生の多様化と数の増加、教育環境の変化によって、日本事情は、単に留学生に対して知識を教授する狭い枠組みを解体し、日本人学生をも射程に入れ文化背景を異にする学習者同士の異文化間コミュニケーションの場として開かれた科目へと転換してきている。<sup>(2)</sup>

このように日本事情が日本人学生にも開かれることは、それを留学生が知識、情報としてのみ習得するものではなく、留学生・日本人学生・教師それぞれが自らの体験として生きられるものであるという考えに転換してきていることを、如実に物語っているのではないだろうか。留学生に閉ざされるのではなく、日本人にとっても日本とは何か日本人とは如何なる文化的存在であるのかを発見創造する開かれた場、それが日本事情という科目の持つ可能性として捉え返されていると言えよう。

留学生の意見にもあったように、日本事情自体の名称も含めて、日本事情は一層多くの学生に対して開かれなければならないし、何より学生自身が他者の視線を通して開かれて行く場でなければならない。つまり、留学生の世界ができるだけ日本人学生との共通の場へ開かれるべきであり、またその反対に日本人学生の世界が留学生も共有できるよう開かれなければならないのである。留学生だけを囲い込むのではなく、日本事情が更に日本人学生へと開かれていくことで、機関としての留学生センター自体もまた日本人学生に対し

て開かれて行くのではないだろうか。

このような「日本事情」は、文部省の通達が意図する従来の日本事情の概念を大きく踏み出しているかも知れないが、学生がそのような場を強く求めている現状に鑑み、我々は新たな日本事情の在り方を考えなければならない場所に立たされていると言える。

## 注

- 1 「創造する日本事情」(『広島大学留学生センター紀要』第8号所収 1998)
- 2 「多文化クラスの大学間および地域相互交流プロジェクトの実施と評価に関する研究」(課題番号09680297 平成9年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果中間報告書 研究代表者 土屋千尋 1998年3月)

## 98年度後期講義参考図書

【現代家族論】 奥田隆男他 化学同人 1995

【家族データブック一年表と図表で読む戦後家族1945～96】 久武綾子他 有斐閣 1997

【日本語表と裏】 森本哲郎 新潮社 1985

【人と人との間】 木村敏 弘文堂 1972

【気の構造】 赤塚行雄 講談社現代新書

付録1 最終アンケート

日本事情概論アンケート 氏名

1 講義について感想を述べて下さい。

2 発表について。

a、何時間ぐらい一緒に準備しましたか。

b、負担に感じましたか。

それは何故。

c、楽しかったですか。

それは何故。

d、共同発表にはどのような意義があったと思いますか。

3 この授業を履修して良かったと思いますか。

それは何故ですか。

4 授業について改善すべきだと思うところはどこですか。